

日蓮における仏弟子の自覚

庵谷行亨

日蓮（一一二二～一一八二）は法華経こそが釈尊の真実の教えであるとして、その生涯を法華経の受持弘通に捧げた。日蓮が法華経に立ち上がった理由には、日蓮の法華経受容とそこから喚起される日蓮の仏教者としての自覚が考えられる。

日蓮は、末法の世の人々の救済に偏重の慈悲を寄せられる釈尊の御意を、法華経の「流通分の心」に感受し、釈尊の御意を実現すべく虚空会上において付属を受けた者としての自覚に立って法華経を弘通した。その仏事の履行が、日蓮にとって真に仏弟子として生きることの意味でもあったのである。

日蓮における仏弟子の自覚を、日蓮が受容した法華経の教えをとおして検討するとおよそ次のような点が指摘できると思われる。

一、仏法の弘通は仏弟子の使命であるとの自覚

日蓮は『立正安国論』に次のように記している。

「主人の曰く、予少量たりといえども、忝くも大乘を学す。蒼蠅、驥尾に附して万里を渡り、碧羅、松頭に懸りて千尋を延ぶ。弟子一仏の子と生まれ、諸経の王に事う。何ぞ仏法の衰微を見て、心情の哀惜を起さざらんや。」『昭定』二一九頁真（原漢文）。

日蓮は、仏弟子としての強い使命感に燃えて『立正安国論』を執筆、奏進したのである。

二、法華経如来神力品別付属の主體的受容

日蓮は、見宝塔品における滅後弘教の勅命である「三箇の勅宣」を受けて、如来神力品で「まさに広くこれを説くべし」と誓い別付属を蒙った本化地涌菩薩の自覚に立って、その責任を全うしようとした。

三、法華経弘通の身に興起する値難こそ真の法華経の行者の証であるとの信解  
日蓮は法華経弘通の生涯において数々の法難に値遇した。法華経には「滅後の弘教者は不惜身命の覚悟が必要であり、如来が在世に遭遇した以上の数々の大難に値う」と繰り返し説かれている。日蓮は難に値うことによつて、法華経の経説のとおりに行者であることの証明を得たと受け止めた。日蓮にとって法難は法華経の色読であり、真の仏弟子の証明でもあったのである。

四、知教者の使命

日蓮は『開目抄』に次のように記している。

「日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。」『昭定』五五六頁曾。

知教者とは釈尊の本意を知る者であり、そのゆえに釈尊の本意に違背した現実を知る者でもある。したがって知教者は釈尊の御意の実現に向かつて立ち上がるべき責務を帯びている。「これをしれる」日蓮は、釈尊の悲願である救国、救民の使命を担い果敢に法華経に立ち上がったのである。

キーワード…本化地涌菩薩、法華経の行者、知教者